

かういふ神仙學の書では、慶長以來諸家著述目録に、玄學月令編、玄學得門編、神仙教化編、神仙方術編、神仙行氣編、神仙採補編、神仙道引編、神仙服藥編、太一遁甲古義のごとき書が見え、又、老子經集解(老子集語稿の註解でもであらうか)のごとき、やはりこれに關する書であらう。次に醫術の書も、支那文化に關する性質を持つが、それは、醫者としての篤胤の職業からして特別の關心も持たれたのであらうが、又一方では、それが、篤胤の憧憬する仙術、玄學に關係があるからで、既に前述の老子集語稿にも、醫術、養生論に關する説が録されてをり、葛稚川の説についても亦同様である。即ち、

醫宗 仲景考 一卷

のごときは、世にいふ醫宗の張仲景とは、葛稚川の從祖(祖父の從兄)の葛孝先の作り出した人物とおぼしきことを考説したもので、その葛孝先の醫方術にすぐれたことをも説き明してゐる。この中にも、「孝先翁の方術は、此等の神仙より受たるが多かるを、稚川翁其の由來をも奉^{うけたま}はりて」と云つてゐるごとく、仙術の流を引いてゐるところから、これを尊み喜んだものである。文政十年九月の伴信友の序がある。このやうにして、葛稚川に傳はつた醫書を稚川が別に撰述した

ものが金匱玉函方であるが、金匱玉函の名を醫書に稱することは、張仲景に始まると云はれてゐる。かくて、金匱玉函方の内容を、晋の王叔和がアレンジして金匱玉函要略を撰し、又、同人の金匱玉函經も、葛稚川の金匱玉函方より分れ出したものと思はれて、これらにも原書三卷には種々の錯亂があること、又その傳本などについても、本書に詳しく解説してゐるが、別に篤胤は、

金匱玉函經解 三卷

を作り、原文に簡單に註解を加へた。醫宗仲景考は、終に「文政九年七月記」とあり、文政十年十一月朔の生田國秀の序、又、川崎重恭の跋がついてゐる。金匱玉函經解には、文久元年五月の久保季茲の校正例言があり、それによると、この書の稿本には初中後の三種が存し、各闕漏があるので、第三稿本を底本として、校者が撰定したのが即ちこの書である。又諸稿本の題名も一定せず、傷寒雜病論約説、仲景方論纂要、傷寒論解などとあつたが、著撰書目によつて、その書名を決定したのであると云ふ。解の第一卷第二卷の本文は九篇二百十八條より成り、それに季茲が大異のある文章を終に纂録してゐるが、又別に、第十篇の瘧病篇を附し、これは殊に未完成の稿本であつたのを、季慈が金匱要略等で補正して解の第三卷としたのである。別に、金匱玉函經考

文として、金匱玉函經の本文を考定した理由を論證した書も撰定せられるはずであつたやうである。これらの他、神仙至要方や、慶長以來諸家著述目錄によると、醫宗脈言、傷寒雜病論集解、名醫方函類編等の名が知られ、山田博士の紹介せられた大壑苑禁方（神方拾遺、名家經驗類聚名函）等もこの種の書であらうか。

孔子聖說考 二卷

本書は著撰書目にも出てゐるが、全部は出来てゐなかつたのを、門人の碧川好尙が補訂したもので、初の方の、鷓冠泰鴻篇からとつた六條の本文とその註解及び眞聖僞聖の論だけが、篤胤の原撰である。もとは、孔子の語から聖に關する説あるを彙集して解説を附けようとしたものらしいが、それまでには及ばなかつた。この泰鴻篇に聖の語が用ひてあるについて、邇々藝命こそは、泰一の云ふ聖に當らせられることを力説してゐるのが注意せられる。又、眞聖、僞聖の説について、孔子のときは、まだ眞の聖ではなく、「孔子の聖か否かは、誰も自づからに知なむ物ぞ。また然る孔子の博識多能なるに、老子をかく懼りし趣を以て、老子の大徳を觀るべし。在位の人ならで、古説の聖に叶へるは、夏殷周三代の間に老子を除きて有ること無し」と云つてゐるこ

とく、老子を聖として貴んでゐるところにも、篤胤の自然神道的な神論の思想を汲みとることが出来る。本書の終には好尙が、諸子百家から聖説に關係ある語を抄出して附録とし自説をも加へてゐる。本書の初名は靈知能品定と云つた。

印度藏志 二十五卷

著撰書目に二十五卷と見えるが、全集には、卷一―三卷の印度國俗品、卷四―卷八の大千世界品、卷二十一―卷二十三の印度傳通品が收めてある。印度國俗品は玄奘の西域記から抄出した文章を本文として註解を加へ、印度の國家の風土習俗の類を知る總論としたもの、大千世界品は主として長阿含世經記から取り、なほ起世經その他類似の經文からもとつてこれを補つたものを本文とし、これに註解を加へたもので、印度の創世紀であり、太古史である。印度傳通品の一は「此品には佛滅後百餘年より、第四百年に至る間は、唯小乗のみ流行せるが、其の間に次次異部起りて、大衆部破れて九部となり、上座部破れて十一部と成れる其の差別を論ひ、また因に其の間々に有し事の心得べき事どもを註し辨へたり」同二は「此の品には佛滅後第四百年初より、第五百年中に至る間に、健駄羅國の迦膩色迦王と云ひしが、說一切有部の古説を結集せる事、か

つ次々に謂ゆる小乗の諸經共、六足、發智、大毘婆沙、四阿含などの出來し時代、また其の經論共に就て心得べき要事を因々に考へ註せる也」といふ内容で、異部宗輪論その他の書、わが國の八宗綱要なども用ひてある。要するに佛滅後の佛教史で、八卷と二十一卷の間に、釋迦一代記なども含まれてゐたのであらうが、本書の稿本は全備完成しなかつたのではないかと思はれる次に記す、印度藏志未定稿（印度藏志稿とも云ふ）の十は、この間に入るべき部分の未だ整理を經ない別稿であらう。

印度藏志未定稿

十卷

世間成敗品第三、起世本品緣第四、佛祖世系品第五、佛生養育品第六、遊藝生子品第七、發心出家品第八、求道樂行品第九、佛像品、三災品、大本緣經、その他に分れ、佛經の天地開闢說、及び釋迦傳を經文より抜いて、出典を明かにし、考説を加へた。この中最後の部分のごときは、品名もつけてなく、殊に未完成のものである。

密法修事部類稿

四卷

密宗の經文儀軌の類から抄書したるもの。殆ど考案は加へられてゐない。但し、かういふ研究は、

やはりわが國の古傳、古意が、それらの法術に傳へられてゐるといふ見解からで、印度藏志稿卷八にも「此は已往おれに謂ゆる秘密儀軌てふ物を普ねく見て考へ記せる物ある」と云つてゐるのは、この書であると思はれる。

洋學の書については、明かでないが、慶長以來諸家著述目録に見える、「蘭學用意 二」が存するならば、この方面の篤胤の智識と理解とをうかゞふに足るものであらう。

平田門の教育の方法については、玉だすき卷九の終に、已れに隨ひて物學ばむ輩に、第一に讀しめむと、先に長だちたる弟子らに書しめて、童蒙入學門と名付たる漢文の一卷あり。―まづ始めに敬神の道を教へ、次に幼童の必ず行ひ知べき事等を述べ、終りに文學の大意を辨ふべく記せる物也。扱いさ少かも書讀む事を辨へたる上にては、古事記の序を始め、世々の御紀、及び令式格等の序表など取集め、次々に讀習はせて、帝道の大意を知らしめ、學問の眞柱を立て、大倭魂の鎮めと爲し、さて後には、漢籍四書五經、諸子百家、印度西洋の書と云ども、心の儘に讀しむる事と爲り。

とあつて、その學問の精神と順序が記されてゐるが、更に具體的には、平田塾の方針として、そ

の終に校者の言として、

我が同門の幼童ら、先づ素讀のはじめに讀べきは、童蒙入學門、次に皇典文彙、さては赤縣太古傳、太昊易傳、同古曆傳等の成文を讀みて、赤縣州からくにの古傳説、及び易曆の主旨を知り、また説文解字の序を讀て、文學の起原を辨へ、孫子正文を讀て、兵學の大意を心得べし。また葛仙翁文粹、古學二千文、必ず讀べし。また西田氏の神代略記などよき物なり。

とあつて、これらが平田塾の教科書であつた。古學二千文は生田國秀の著である。一句四字、全部二千四百十六字で書いたもの、私の手元には、元治元年に、神祇伯家學師豊浦大年が全部の訓讀を付した書がある。

以上のやうに、主として漢文で教育するといふのが平田塾の方法で、普通の國學者の文章を軟弱として取らない、硬派教育であつた。大道或問の終に書き添へた碧川好尙の文に、

正道を學び候書籍の順を申候はゞ、日本紀古事記等は、天皇の御記録にて、第一の本書に候へ共、初心の人には解し難き處も多く候へば、先づ玉匣、玉禱、古道大意、入學問答などを讀候て、道義の大概を辨へ可申、其うち分て、儒道の事を心得候には、桃岡雜記、西籍概論、

經義大意、稜威雄語などをよみ、佛道の事には、出定笑語、正實直言記などの順にて候。いづれも初心の爲に讀やすく書取候ものに候。且又幼童の素讀も、多くは漢籍をば後にして、まづ、皇國の漢文を習ひ可申、師家の童蒙入學門、皇典文彙などより始め可申事に候。抑師家の書等を被讀候様申候をば、如何敷事と可被思候へ共、大概世間儒流の者の著書は、尊卑上下の分正しからず、國學家と稱せられ候人々は、旨と雅言綺語を心がけ候作り物故に、文意情弱迂遠にして大道の義理明らかに聞がたく、捷徑ちかみち便利の書物なき故にて候。

と、その教程を説き、心構へを明かにしてゐるが、この中には、平田派以外の人々の著をも推稱してゐて、自派に偏してゐない。反對派の橋守部の稜威雄語をさへあげてゐるのである。

かういふ教科書としては、全集の第十四に收められた。葛仙翁文粹（四卷）、皇典文彙（三卷）、赤縣太古傳成文、太昊古曆傳成文、太昊古易傳成文、古易大象經成文、童蒙入學門、説文解字序（各一卷）等が出てゐて、いづれも漢文のもの、祝詞正訓や、二種の毎朝神拜詞記や古史成文等も亦、この目的のため、又、儀式のためにも實用に供された書である。前に引用した平田門の注意と参照すれば、それは明かである。

なほ、門人の著の中には、これらを傳したものがあつて、生田國秀の「古易大象經傳」三卷のごときはその代表的な書である。本書は總論一卷、本文二卷より成り、古易大象經の註釋書で、周易の象傳を解釋したもの。篤胤は別にその本文のみを教科書として、古易大象經成文を撰んでゐるが、それに對しての註解である。國秀の原稿に篤胤が筆削を加へて成つた。卷首には總論を添へてゐる。本文は六十四條より成る。國秀の總論に篤胤が「著西蕃太古傳以明乎赤縣太古之君主仙眞即爲我天神地祇之訛傳、尋吳八卦稽疑傳。蓋以太昊伏羲氏、即我大物主神而其所作之易卽是產靈神之遺道也。博討遠求輯爲四卷。復編三易由來記、易學五十年論等以附之。(凡此傳中、曰師說曰本編者皆謂此等書也)」と記してゐて、その趣旨を明かにしたが、易學五十年論等の著も亦、易に關して篤胤は撰述してゐたらしいのである。天保五年正月元日の篤胤の序嘉永七年三月の新田目道茂の序、天保三年六月の國秀の總論が卷首の一冊となり、天保六年六月朔日の跋が終につく。なほ、篤胤は、この大象經の本文を欽命錄と稱してゐた。

これと姉妹書は、「象易正義」二卷で、易に象易、象易の二種があり、前者は周易象傳に傳へられ、後者は、斷易となり、原典は散亂したので、篤胤が諸書によつて新に撰んだのが象易編であらう。この象易編の本文と、出典とを記したものがあつたのに、新に、生田國秀と新田目道茂が共力して、その註解を書いたのが本書である。古易大象經傳成つた後、篤胤の委囑により、國秀その註解の業に従つたが、中道にして死んだので、その後をついで道茂が完成したのである。嘉永七年正月の荒川秀高の序、又、同年月の奥書を持つ道茂の跋にかへた結論なるものがついてゐて古易について論じた。

靈性に關する著は、やはり古道における、神の實在と、従つて、神異の實現を信する心から生れたもので、それは又、支那研究における神仙、方術への興味の現れにも、篤胤の憧憬したところが窺はれるのであつて、自然に、老子を尊重し、一種の道教的な氣持にも向ふやうになつたのではないかと思はれて、その點、篤胤の衷心の國家的精神は動かないとしても、この方面の篤胤の研究や觀察は、聊か中心をはげれた觀があるものとなつてゐることを免れなう。

鬼神新論 一卷

まとまつた著書としては、最も早いときの著である。神靈の實在を説き、且つ儒者の神靈なしと云ふ説や、佛者の誤れる靈魂觀を論じたもの。「此書かける事は、今年文化二年と云ふ年の彌

生の末の十日ばかり……この書かき終ぬるは、同じ年の五月なかばになむ有りける」更に「文政三年と云ふ事の春考へ訂せる年ありて、少か書き改めつ」と終りに記してゐる。文中にも、文政三年の意見が新に書き加へてある。文化三年七月の鈴木朗の序、同年六月二十八日の藤井高尙の序、美濃の市岡殷成と下野の龜山嘉治とが刻板としたよしの跋がある。

古今妖魅考 七卷

文政十一年四月の鐵胤の「此書の成れるゆゑよし」があつて、「これの古今妖魅考といふ書はも、林羅山先生の説に依りて、我父の、世に化物と云ふものある、其本縁を考覈められたる書なり。……此文政の五年と言ける年に、其を大抵に記し序でて、自らの考按をも添られたるに、三百葉許とさへ成つれば、書の名をもかく負せて、……今年また強てこひ申て、かく淨寫して、我黨の人々に見する事とは成りぬ。かくて此論説の次第を云はむに、先始めに天狗といふ名義を辨へ、はた其物の形狀を、和漢の書に證し考へ、日本紀の訓に依つて、天狐ちふ物の事にも及び、夫より彼の佛祖釋迦法師が、立たる戒の許多ありて、其れに違はむ者は、盡に魔道に墜つとふ、其道の法なるを、世々の僧等の、そを脱れたるは、一人も有まじき由を説き明され、將その物ど

もに、三熱の苦みと云事のある因縁をのべ天堂地獄の體相、種々の苦患ある事をも辨へ閻魔地藏などいふ鬼の由來、序に三途河の老婆の事にもおよび、夫れより西方極樂淨土の往生といふ事までを解呈して、然る事どもは悉く佛祖の幻説ありしより出來たる事なる由を、博く諸の經論を引て考へ注され、終りに源平盛衰記なる、開發源大夫住吉と名告れる者の語、また太平記なる、雲景が未來記と云物の説などを摘出て、貢高邪慢の所爲ある者は、悉く魔縁にて、果はみな天狗道に落べき事、はた我古學の輩といへども、其心なるは、皆同じ惡道に落べき由縁までを、悉く辨へ論はれたり。」とある。この解説によつて明かであるが、高慢な者は天狗道に陥るといふ意見が、大國隆正の特色ある著、鼻くらへの草紙などにも、影響を及ぼしてゆくのである。天保二年に越後の桂譽正が刻本としたよしの序がある。

仙境異聞 二卷五冊

一名、仙童寅吉物語。

七生舞 記 一卷

竹内健雄の神童憑談畧記（別本仙境異聞）とよもに、仙境異聞の附録となつてゐる。

下谷七軒町の越中屋與總次郎の子寅吉が仙翁にありて仙術を會得したといふ話を聞き、同好の士が揃つて文政三年十月朔日に、この十五歳になる仙童にあつて、その素姓をたゞし、自後、篤胤はこの仙童を信すること深く、機會を見ては、仙界のこと、神道のこと、萬般のことを問ひ尋ねて、わが意に叶ふを喜び記録したものがこの書で、上巻の一卷は寅吉の經歷を記し、他は問答體で篤胤と寅吉の問答を筆録したものである。七生舞の記は、寅吉との問答の中、特に仙界の音楽に關することを尋ねて、七しやうの舞、又は御柱の舞があるといふ答を得、それを古樂古舞の眞實相と考へて、その次第を詳しく説明した部分だけを一部としたもので、この書では七生の舞と字が宛ててあるが、仙境異聞では、七韶の舞と記してゐる。かくて、この書の終に、文政五年二月朔日とあつて、この時に、仙境異聞が附録とともに成つたが、更に二月十五日の追記がある。別に、門弟の松村完平がこの寅吉との問答を聞き書したものもあつて、これには屋代弘賢が嘉津問答（嘉津間は寅吉の改名）と題したが、それには庚辰（文政三年）十一月十二日の日附が見える。又、仙境異聞の内容を、そのやうに問答體にせず、大體を一續きの物語に書きなした神童憑談畧記といふものを、師の篤胤とともに寅吉と問答の座に侍した門下の竹内健雄が書いてゐる。

これには終に文政四年四月の年月が見える。これらがすべて、仙境異聞の一部を成してゐるのである。篤胤はこの寅吉を信すること深く、門下に加へて、寅吉が、山に修行に出るときには送別の歌まで詠んで與へたりしたが、そのために、世間では、篤胤を山師と云ひ、寅吉をそ、のかして、世を欺くものであるなどと悪口が流布せられたこれを、仙境異聞の中にも書いてゐる。この寅吉は篤胤周囲の學者がもてはやしたのみならず、水戸の立原翠軒なども寅吉にあつて信じ喜んだことを仙境異聞に記してゐるが、寅吉は後に、篤胤の意に反いて僧侶になつたらしい。なほ、これに類したことは、「稻生物怪録」四巻といふ書があり、これは、備後の三次郡の住、稻生平太郎の屋敷に、寶延二年、平太郎十六歳で留守居をしてゐる頃、山本五郎左衛門と稱する魔王が種々の仙術を使つて妖怪變化を現はし、平太郎を脅したが、平太郎は遂にこれに屈しなかつたので、山本五郎左衛門もその強勇に感心して退散したといふ物語を、讀本風に綴つたもので、坊間に行はれた寫本には、稻生平太郎物語と題したものなどがある。篤胤はこの書に興味を持ち、校合して、文化三年九月十五日の序を加へ、挿繪をも澤山挿入して刊行したが、一種の怪異小説の體裁となつてゐる。篤胤がこのことを事實談として信じてゐたことは、仙境異聞の中

で、「また備後國の稻生平太郎が許に來れる。山本五郎左衛門と云ふ物怪と、平太郎が應對せし時に、産土神と見えて、冠裝束嚴なりける神の半身を現はし平太郎に添て、挨拶せられたるを思へば、平太郎が物怪に率られざりしも、氏神の守護ありし故と思はれ」(これと全く同じことは勝五郎再生記聞の中にも見える)と記してゐる。

勝五郎再生記聞 一卷

武藏多摩郡中野村の百姓源藏の悴勝五郎なるものが、文政五年十一月八歳の時に、自分は、稻窪村の久兵衛といふ者の子藤藏と云つたが、文化七年二月四日に六歳で死んだのが生れ替つて來たのであると云ひ、その轉生の間のことをよく記憶し、又、藤藏と云つた時分のことをも覚えてゐて、後に調査したことと、少しも事實が違はなかつたといふ話を書いた或人の筆記を讀んで、篤胤自身も學友門弟たちと勝五郎やその關係者にあつて問ひたゞした事の次第を文政六年四月二十九日に、門人の立入事負が記し、更に、それに篤胤が種々の意見や考説を附したもので、なほ種々の怪異にあつた人の話なども記してゐる。終に文政六年六月七日の日附が見える。又、同年十二月十三日の序があつて、それによると、六月末この書を清書しをへて後、これを携へて上京し、

富小路家へ出入してゐるうちこの書のことを申し上げたところ見たいとのことで、八月十三日の夜持つて行つてお見せすると、これは大へん面白い書だと氣に入つて、その翌日、仙洞御所の叡覽にもお供へしたところ甚だ叡感があつて、それより大宮御所にも御覽せさせられて、大御心に叶ひ、女房たちにも仰せごとがあつて書寫せしめられたので、五十日ほど御手許にとどめおかせられて、十月四日に富小路家へ返し下されたといふことである。その紙の一枚一枚にも、長き御手を觸れさせられたことを想つて、篤胤は感涙にむせんでゐる。

以上で、靈恠に関する著を終る。次に、雜著としては、平安文學の註釋書として、

神樂歌考稿 一卷

平安時代の神樂歌の採物歌の杖までの解釋、韓神以下は、大體の考案と解説とを記した。この書、神樂を神道の一つの藝能として見れば、古道の書の中に入れて方がよいが、假にこゝで解説を加へておく。

伊勢物語梓弓 一卷

伊勢物語の始の方を、契沖の勢語臆斷や賀茂真淵の伊勢物語古意によつて註解したもの。篤胤

としては異例の著で、純粹の國文學者の註釋書の體裁に従つてゐるが、未完である。但し篤胤の記すところによると、本書にも見える篤胤の伊勢物語成立説と信友のそれとが、たまく一致してゐたに拘らず、信友は殊更に篤胤にすゝめて、本書の公表を差控へさせながら、自分自身は本書と同じ説を公にしたといふいきさつなども、兩人不和の原因になつてゐる點が興味をひく。次に歌文集として、

伊布伎廼屋歌集 一卷

雄勁な歌風であるが、その眞實の志を述べた歌の附録に、つくりうたとして、鐵胤が、文化の初頃、人々のすゝめで、篤胤が題詠でつくつた歌を、かねて篤胤は墨を引き消しておいたが、今これを捨て去るに忍びず、終に附け加へてゐる。

氣吹舍文集 二卷

序跋の類その他の文章を集録したもの。この中に、篤胤の早い頃（文化元年）の作である五徳説（一名、德行式）も出てゐる。敬義仁智勇の五種に分けて、鈴木朗と相折衷して、上代の德行を説いたもの。又、立言文は天保四年十月九日になり、天保三年八月に成つた八家論とともに篤

胤の學説の全貌を簡約に見ることの出来る、重要な文章である。兩方とも漢文で書いてある。藏結のものがたりは文化四年の文章で醫術に關する話である。この中、前記五徳式や立言文等、別に獨立して板行せられてゐるものもある。天保十二年までの文章が出てゐる。

氣吹舍筆叢 二卷

隨筆集。

雜稿拾遺 一卷

これも隨筆集である。

徵古歲時記稿 一卷

正月元日の行事に使ふものの考證。終に十干十二支の字義などに關する説明がついてゐる。未成稿と見え、始に「正月（上に辨へたるが如し）」とあるが、その正月の説明は缺除してゐる。雜著の一に入れてよからう。

これらの他、慶長以來諸家著述目錄によると、家禮徵古編、師長論のごとき書名も見えてゐる。篤胤の著書はしばしば書名を變へ、或はその時々で種々の名を附けた呼んだ。鬼神新論と新

鬼神論とが同書であり、天柱五嶽餘論と天柱五嶽考とが同書であるの類が多い。篤胤の天保十三年九月七日の書簡に、

一、德行五類圖説掛物

一、日契曆 我等出生以來ノ所今年ナドノ官曆イマダ書入ズハ入レテ

一、茅屋醫談 一、三山論學記

右何とかして可被遣候

と書いてゐるが、德行五類圖説は德行式であり、日契曆も古今日契曆であるが、三山論學記は三神山餘考と同書が、又、茅屋醫談も篤胤の著書なのか、明瞭を缺く。

これらは主として全集によつて解説を加へたものであるが、進藤隆明の舊事紀疑問、佐藤信淵の天柱記、鎔造化育論、竹内健雄の神童憑談畧記、八田知紀の霧島山幽郷眞語などのごとく、平田篤胤が序文や解説などを書いたに過ぎないやうな書で、他人の著のまぎれ入つてゐるものは省いた。又、鎔造化育論の漢文のものは、篤胤の代作で、信淵に書き與へたものと云はれてゐるがどうであらうか。

なほ「天満宮御傳記略」二巻は、菅原道眞の一代の事蹟や天神の靈驗などを、篤胤風の話や、その口づからの説講に基づいて、文政三年に、門人の根岸延貞が高橋正雄と相談して、物語風に書き著はした一般向きの書で、奥に文政三年五月二十五日の日附がある。鋏形蕙齋紹眞の挿繪入りで、この年に刊行せられた。ところが、天保七年に火災で版木が焼失したので、出羽の能代の門人たちの努力により、嘉永四年八月二十五日の戸倉胤則の序文を附して再版せられた、これも門人の著作に加へるべきものであらう。著撰書目に附した門人著書類（稿成りて師の閲覽を経たる書のみ舉たり）の中には、本書を根岸延貞の著として、宮比神御傳記（石川篤記の著とす）などとともにあげてゐる。これらは、或は篤胤自身の著かも知れないが、通俗な内容なので、わざと門人の著作としたものであらうか「稻生物怪録」などとも、性質に似たところがあるやうである。ひとりごとに附した「其後之事實」といふものは、文政十二年から天保二年までの、篤胤を吉田家の關東目代にしようとする推薦運動その他に關する諸方の書簡を集めたもので、このやうに種々の書簡を集めた書には、篤胤が文政六年に上京した時、その援助者と反對者とが、本居大平に書き送つた諸學者の書簡の類を一部にした「毀譽相半書」二巻がある。これは始め大平が整理し

ておいたのを文政十一年に三河の中山美石が見更に、篤胤門の羽田野敬雄がこれを書寫して、篤胤に見せたもので篤胤がこれに増補しまた批評を加へて本編一卷、餘論一卷としたのを、天保五年五月十五日の鐵胤の序を加へて三百部限定で上梓したものである。その他、篤胤自身、又その家族の書いた日記や書簡の類で傳へられてゐるものも少くない、これらはいづれも、篤胤の傳記資料としても貴重である。

その他前にも記した門下の名で出てゐるものの中には、師の篤胤が、代作してやつた書も種々あるであらうが、今はそれらを一々辨別するのも免倒であるから、ここには掲げないことにした。

以上の書の中、上梓せられたものは、そのところへに書いたごとく、すべて書肆によつて刊行せられたのではなく、いづれも門人の資財の獻納によつて平田塾から出版せられたものであることは注意すべきで、それゆゑに、いづれも塾の藏板となり、その板木が長く平田塾に保存傳來せられた理由である。この門人の師に對するうるはしい誠心と學問に對する努力とは、まことに尊ぶべきで、平田學の發展は實にこの同志的結成の力強い賜物であつた。

六、結 語

世に荷田春滿、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤を國學の四大人と稱する。これは篤胤の門下によつて云ひ出されたことで、大國隆正の學統辨論に「神道のまことをひきおこしたる人よたりあり。羽倉春滿、岡部真淵、本居宣長、平田篤胤これなり。吾國の神道久しくすたれてありけるに、より道統つづかず。しかはあれど、羽倉春滿翁の岡部大人を得て、發明の道を傳へられしは、我國にて道統おこれる始になんありける。……おのれ、かくのごとく初祖二祖三祖四祖と道統をたてて猶よく思ふに、四大人の説おのひとしからず」と見え、四大人の稱が出てゐる。又、この他に篤胤を除く三大人の稱もあつて、篤胤の門人六人部是香の門なる川喜多真彦の近世三十六家集略傳には「嗚呼世の學徒、今に至つて、東滿、真淵、宣長の三翁をして三大人と稱し、古學

の祖とし、神の如く敬重して、これを祀るも宣なり」と記してゐる。併し、これらの三大人、四大人の基は篤胤自身が置いたもので、古道大意の中で、篤胤は「荷田宿禰羽倉東滿翁、賀茂縣主岡部眞淵翁、平阿會美本居宣長翁、この三人の大人等、次々に勵み學ばれ」と、三大人を立ててゐるのであるが、更に、毎朝神拜詞記には、二十七條の學神の中に、「羽倉大人、岡部大人、本居大人、久延毘古命乃御前乃慎美敬比、學問乃業爾悟深久、彌獎爾獎給比、足波不行杼毛、天下乃事等、知給幣斗、畏美襦美母拜美奉留」と擧げてをり、この久延毘古は、毎朝神拜詞記を、みづから解義した玉だすきの中にも「さて久延毘古命は亦の名を會富登神とも云ふ」と記してゐることく、會富騰と同じ神であるが、篤胤は、この久延毘古や會富騰を自分自身に比してゐるのである。その事は、篤胤の歌集を見ても、たとへば、篤胤が秋田に歸つた後、

千世ませと君を祈りの久延彦が古里に立つ春ぞのどけき
などのごとく、自分を久延彦として詠んだ歌が散見し、或は

張る弓の放ちもあへず秋の田に又たつ足もなき會富騰かな

とも詠んでゐるのでも明かで、即ち、この毎朝神拜詞記によつて、教育せられた篤胤門下の人に

は、自然にこれによつて、國學の四大家を一つの道統として觀ずるやうにもなつたのである。

國學の道統を考へ、國學の眞實の精神や思想の流系を思ふと、この國學の四大人こそは、やはり國學の歴史の中樞にあるものとして、取り上げられることが最も自然である。それは決して、篤胤門の作爲によるものではなく、極めて當然な歴史上の展開でもあつた。

國學の發祥は契沖に置かれるべきことを私は考へてゐるが、ついで荷田春滿によつて、國學の精神的基礎が確立したのである。次に、賀茂眞淵にいたつて、國學は文藝的方面に發展し、和歌の革新が行はれた。本居宣長は、更に、この精神を歴史研究の上に、又言語研究の上に、又神道研究の上に、即ち、多くの重要な文化の部面にわたつて、押し進め、その改革の原動力とした。さうして、最後に平田篤胤が出て、この國學の精神を國內のみならず、國外にも及ぼして、ここに外國の文化を擒從しようとする方法が取られた。馭我の精神が即ちこれである。このやうにして、國學の發展が跡づけられて行つた。しかも、これらの國學の精神を一貫するものは、わが古代の研究によつて、純粹の眞實のわが國の本質を明かにし、もつて、現實に對する覺醒の警鐘たらしめようとするところにあつた。ここに、神代以來の古代の歴史と文化の研究を通して、道を

明かにしようとする國學の中心たるべき課題が、常に中核となつてゐるのである。即ち、古道——古きが故に常に新しい——この道に對する態度が國學者であるか、然らざるかの資格を決定する。さうして、古道を中心生命とするところに國學の意義を見出だすならば、この道を追求する精神の大きさ、烈しさ、鋭さ、強さが、その業績に反影して、そこに國學者の價値が明かとなつて来る。その結果として、どうしても國學を代表する偉大な學者としては、四大人があげられたければならぬのである。

篤胤の精神、思想、さうして業績を考へて來て、その歴史的な位置が明かにせられるとき、篤胤の國學における功績は、これを内にしては、篤胤の努力により、古道の意義を實踐の面に確立して、復古神道が、わが國の信仰の基礎となるにいたつたことと、これを外にしては、外國の古代文化の研究にまで、國學の範圍を擴大することによつて、國學を世界的視野に繰り上げ、もつて、その内容の充實を測つたこととである。八紘爲宇の御精神や帝道唯一の御精神に基いて、大義名分を正し、もつてわが國體の尊嚴が万邦無比なるを明かにしたのも亦、篤胤の偉大なる功績を云はなければならぬ。思想の深さと精神の純粹にして且つ強烈なること、又、篤胤にいたつて

極まつたと云つてよい。時はまさに幕末風雲の時代に際會して、篤胤の毅然たる教が、その門下に多くの勤皇運動の、實際家、行動家を出したのも亦甚だ當然であつたと云はなければならぬ。これは、今までの國學者の間には殆ど見られない現象で、即ち、國學が、あらゆる意味において、この實踐的な行動にまで結びついて來たことは、又、篤胤が國學の意味を一段と高く飛躍させて、ここに、教と學、行と知とが一致した結果に他ならぬ。平田派の學者にいたつて、本教と本學とを對照して呼び、しかも、學者が一身にこの本教と本學とを具備することを根本の精神とした。教學の一致が、身を以つて具現せられることを學者の本領とした所以も亦、そこにある。平田學の理想が、現代の精神において最も生かされるべき理由を持つことは、以上述べるところによつて一層明確になつたであらうと思ふ。篤胤の生命は、多くの勤皇志士を通して、現代にまで流れてゐる。一時見失はれてゐたかの感がある道が、今再び開けつつあるのである。篤胤の魂が幕末維新に際して働いたごとく、今日の時代において、再び、この巨人の靈が生きかへることを祈つてやまない。

平田篤胤全集(舊板)目次

第一冊

- 古道大意
- 俗神道大意
- 歌道大意
- 志都乃石屋(一名醫道大意)
- 西籍概論(一名儒道大意)
- 出定笑語(一名佛道大意)
- 出定笑語附錄
- 出定笑語原本
- 悟道辨(一名尻口物語)
- 氣吹於呂志

第二冊

- 靈の眞柱
- 三大考辨々

天說辨々

- しものまにく
- 大道或問
- 牛頭天王曆神辨
- 伯家學則演義
- ひとりごと
- 吉家系譜傳稿
- 伊勢物語梓弓
- 神樂歌考
- 氣吹廻舍歌集
- 氣吹廻舍文集
- 氣吹含筆叢
- 呵妄書
- 天柱記稿

鎔造化育論稿

雜稿拾遺

本教外編(本教自鞭策)

第三冊

- 鬼神新論
- 史今妖魅考
- 仙境異聞(寅吉物語)
- 神童馮談略記
- 七生舞の記
- 勝五郎再生記聞
- 幽鄉眞語
- 稻生物怪錄
- 徵古歲時記

第四冊

- 每朝神拜詞記
- たまだすき
- 玉禰總論加追

天津祝詞考

祝詞式正訓

神拜詞解

古史傳外篇上卷

本教玄妙篇上卷

神道玄妙篇

古學諄辭集

第五冊

- 三易由來記
- 三曆由來記
- 夏殷周年表
- 春秋曆本術編
- 前漢歷志辨
- 醫宗仲景考
- 金匱玉函經解
- 孔子聖說考
- 老子集語

第六冊

- 弘仁歷運記考
- 春秋命曆序考
- 赤縣太古傳
- 黃帝傳記
- 太昊古易傳
- 太昊古曆傳
- 葛仙翁傳
- 第七冊
- 古史傳(一之卷乃至九之卷)
- 第八冊
- 古史傳(十之卷乃至十九之卷)
- 第九冊
- 古史傳(廿之卷乃至廿九之卷中)
- 第十冊
- 古史傳(廿九下之卷乃至卅七之卷)
- 第十一冊

天朝無窮曆

- 古史年曆稿
- 第十二冊
- 古史徵開題記
- 古史徵
- 神代系圖
- 古史本辭經
- 第十三冊
- 印度藏志
- 第十四冊
- 密法修事部類稿
- 大扶桑國考
- 葛仙翁文粹
- 皇典文彙
- 赤縣太古傳成文
- 太昊古曆傳成文

- 太昊古易傳成文
- 古易大象經成文
- 童蒙入學門
- 說文解字序
- 天柱五嶽餘論
- 第十五冊
- 神字日文傳(附錄疑字編)
- 印度藏志未定稿
- 三五本國考
- 三神山餘考
- 宮比神御傳記
- 舊事紀疑問
- 入學問答
- 赤縣度制考

平田篤胤全集(新版)目次

- 第一卷 古史一
古史成文。
- 古史傳。(一之卷乃至九之卷)
- 第二卷 古史二
古史傳(十之卷乃至十九之卷)
- 第三卷 古史三
古史傳(二十之卷乃至二十九之卷中)
- 第四卷 古史四
古史傳。(二十九卷下乃至三十七之卷)
- 第五卷 古史五
古史徵開題記
- 神代系圖
- 古史徵
- 第六卷(未刊)
- 第七卷 神道 道教一

- 古道大意
- 古道大元顯幽分屬圖說
- 大道或問
- 神道玄妙論
- 本教玄妙篇
- 俗神道大意
- ひとりごと 附其後之事實
- 吉家系譜傳
- 伯家學則演義稿
- 赤縣太古傳成文
- 赤縣太古傳
- 立言文
- 大扶桑圖考
- 三神山餘考
- 三五本圖考
- 天桂五嶽餘論
- 黃帝傳記

老子集語稿

- 第八卷 道教二
鬼神新論
- 古今妖魅考
- 仙境異聞
- (仙童寅吉物語。神童憑談略記。七生舞の記)
- 勝五郎再生記聞
- 幽境眞語
- 稻生物怪録。
- 第九卷 儒道 佛道一
西籍慨論
- 呵妄書
- 孔子聖說考
- 五德說
- 出定笑語
- 出定笑論附録

出定笑語原本

- 悟道辨
- 第十卷 佛道二
印度藏志
- 印度藏志稿
- 密法修事部類稿
- 第十一卷 (未刊)
- 第十二卷 天聞 附歲事 曆術一
天柱記(天之御桂之記)
- 鑄造化育論
- 平田先生鑄造化育論
- 徵古歲事記稿
- 太皞古曆成文
- 太皞古曆傳
- 三曆由來記
- 夏殷周年表
- 前漢曆志辨

跋

本書は、影山正治氏の勸奨によつて成つたものである。私の尊敬する影山氏の熱心な言葉がなければ、篤胤翁に對する情熱が、これほどまで強く燃されなかつたかも知れない。といふのは、私のやり方は、可成りゆつくりしてゐて、篤胤翁に關する研究も、ぼつぼつその著書を読み、その人を考へて材料を集めてゐるうち、種々の事情が私のさういふやり方を許さなくなり、一學三百枚の原稿を書き下すといふことは、多忙の間に生活する私として、並々ならぬ努力であつたらである。そのために、篤胤翁に關する研究の方針の大綱は、むしろ本書執筆の後に定まつたこと云つてよいほどである。つまり本書を書くことによつて、初めて篤胤翁に傾倒することが出来たのである。その點影山氏に感謝してよい。併しそのため、今後の研究の課題に屬するものが種々

出来て来て、本書の間隙を満たすためにも、もつと調査しなければならぬことが甚だ多いが本書の上梓は遷延を許さない事情になつたので、このまゝで公にするの程かはない。私は、本書の刊行の後、篤胤翁の奥つ城に詣でて、お詫びしたいと思つてゐる。

私は勤務があるため、今十分の餘暇を研究にさけ得ないやうな状態にあり、暑中の期間を、その時にあててゐたが、今年は、亡兒の不幸のために、その時を許さなくなつたのである。本書が十分でないまゝ世に出さなければならなくなつたのも、さういふ事情があつたからであるが、しかも準備は十分でないものの、篤胤翁の國學に對しては十分の理解のもとに本書を執筆したつもりである。その點は既出の篤胤翁の研究に遜色のない特色を持つてゐることを信じるが、更に、本書の増補訂正を今後に期したいと思ふ。又、從來の研究に觸れてあることには略で、さうでない點を精しく録したやうなところにも、本書の特色は認められるであらう。

本書の執筆に當つては、長田偶得の平田篤胤、山田孝雄博士の平田篤胤の兩書に得るところ少くなかつたが、就中、渡邊刀水氏の研究から最も多くの啓發と教示を得たことを感謝したい。種の資料をも貸與せられた渡邊氏の御厚意を銘記する。装釘に用ひた篤胤の藏書印は渡邊氏の所

藏に歸したものである。私は、渡邊氏の編輯して置かれた浩澹な篤胤翁に関する書簡集と日記とが世に公にせられる日の一時も早いことを心から希望してゐる。

本書成稿後、大東亞戦争が宣戦せられた。篤胤翁の精神はいよいよ今日において必要となつて來た。殊に、篤胤翁の偉大なる思想が、今わが國の作りつつある歴史の豫言であるかの如く思はれて、今更の様に敬慕の情を新たにするのである。今日の國民は、すぐれた先覺、古人の魂を現代に生かすことが子孫たる者のつとめであることを知らなければならぬ。戦時下の精神生活は一層の充實を必要とする。(昭和十七年二月一日)

校し畢りたる日

後學 藤田徳太郎

國の道あきらめましおほき大人の高くたふとき
御教へぞこれ

み教への世にあらはるるすめ國の大みしわざを
うべ見そなそなはせ

ここには、平田篤胤の文集から、五徳説、八家論、立言文、藏結の物語、與埴辨の五篇を選び、これに入學問答を加へて、都合六篇を収めて年代順に配列した。これらは短文としては、それぞれ篤胤を代表する文章であるからである。五徳説、八家論、立言文の三篇はもと漢文で書かれてゐる。今、書き下しに書き改めたが、いづれも篤胤の思想の一面を見るべきもので、平田塾では、これらを別に獨立しても出し、教科書としてゐる。藏結の物語は、篤胤の醫家としての面目を見ることが出来る興味深いもの、與埴辨は、外國との問題について、國學者の態度を知るべき文章、入學問答は、最もまとまつた國學の案内として、適當な内容を備へてゐる。短い文章であるから、従来多く重んじられなかつたが、國學の中心思想を簡明に記した、要領のよい手引として、大いに價值を持つてゐるものである。以上のやうな理由で、この六篇の文章を附録として加へて、篤胤を知る便りとするとともに、又、國學者の意見をうかゞふ入門としたのである。味讀せられんことを望む。

附 錄 篤 胤 文 選

五 德 說	藏結の物語
入 學 問 答	與 埴 辨
八 家 論	立 言 文

五 德 說 (德行式)

敬 欽戒忌祇肅齋謹慎謙虔遜讓恭儉勤畏順共弟
義 理廉正直平公莊善純一良清白允信懿貞靖恒
仁 敦厚厯篤誠周忠恕大和孝友慈睦惠泰寬弘溫
智 達明察聰哲睿淵博簡齊慧慮謀權敏聖神易時
勇 果敢強愿毅剛武威恒栗固烈發猛嚴厲節重立
爰に上神の世を稽ふるに、敦厯純固、識らず知らず、道行はれて教へず、徳有りて名無し。皇化
外溢し、文籍連貫するに至りて、則ち始めて名教の方有ることを知る。而して其の名を立てて物
を別つ、書傳に散見して未だ統紀有らず。今、學者の知り易からんことを欲し、彙して之れを列
ね、建てて五類と爲す。

一に曰く、敬人の神に事ふる所以なり。臣の君に事ふる所以なり。子の父に事ふる所以なり。下

の上に奉ずる所以なり。其の尊きを尊ぶ所以なり。其の事に勉むる所以なり。其の屬十九。
二に曰く、義、身を修め善に遷り、邪を流さざる所以なり。道を正し理を別ち、動きて差^さ志^ち無^くき
所以なり。其の屬十九。

三に曰く、仁、上の下を養ふ所以なり。人の群居して和一なる所以なり其の親を親しむ所以な
り。世を濟ひ物を利し、死して朽ちざる所以なり。其の屬十九。

四に曰く、智、是非を別ち利害を明かにし、趣舍を識る所以なり。善く自ら謀を爲し、欲する所
必ず借る所以なり。理に達し命を知り、樂しみて疑はざる所以なり。天下を觀じ百事を察し、博
聞多識なる所以なり。微に通じ神に入り、諸物を妙宰にする所以なり。其の屬十九。

五に曰く、勇、難を攻め苦に堪へ、事をして必ず成らしむる所以なり。義を見て利を忘れ、爲し
て恐^{おそ}ること無^くき所以なり。亂を截して惡を除き、衆庶を長服する所以なり。其の屬十九。凡そ人
の徳行は、此の五類に備はる。其の五名は、一を擧げて以て其の類を目するのみ。必ずしも之れ
を統ぶるに非ず。凡そ徳は敬に本づき、義に立ち、仁に成り、智以て之れを圖り、勇以て之れを
行ふ。是れ其の大較なり。其の循環を語れば、則ち互ひに端を相ひ爲す。其の交通を語れば、則

ち融會して間無し。敬と仁と比し、義と仁と比し、智と仁と比し、勇と仁と比し、義と敬と比し
智と敬と比し、勇と敬と比し、義と勇と比す。比とは或は相ひ反し、或は相ひ類せるなり。各々
其の意有りて悉く説くに暇あらず。學者思ひて之れを得て可なり。

右の徳行五類の圖は、同門の鈴木眼とともに相ひ折衷して誌す。

文化元年歲次甲子三月

名

藏結の物語

傷寒論に、病ヒ脇下ニ素^モヨリ痞有リ、連ナリテ臍傍ニ在リテ、痛ミ少腹ニ引キテ陰ノ筋ニ入ルモ
ノハ、此ヲ藏結ト名ヅケテ死スと見えたる、その脇下ニ素ヨリ痞有リ、連ナリテ臍傍ニ在リと云
ふは、俗に痲積といふ病なり。その痛み少腹に引きて陰の筋に入るは、これ事にふれて發動した
るにて、これを藏結と名づくる故は、その藏氣これがために結塞して、通せざるを以ていふな
り。宋明の諸師も、皇國の諸先達も、さしもさだせず、説きひろめたるものも無けれども、常多
かる證にて、治すべからぬに似て治するあり、治すべきに似て治せぬあり。また痛みて陰の筋に
入るとあれど、さもあらぬあり。醫にいたく恥見する病なり。既に獨嘯の翁も、漫遊雜記に、一
男腹痛ヲ病ム、苦楚堪フ可カラズ。四肢厥冷シ、額上汗ヲ生ジ、脈沈遲シ食飽スルトキハ則チ吐
ク。其ノ腹ヲ按ズルニ、痛ミ胸脇ニ連ナリ、臍を遶リテ陰ノ筋ニ入ル。鞭滿シテ手ヲ近ヅケ難ク、

諸醫畏縮シテ歸ル。余ガ曰ク、是レ塞痲ナリ。死セザルベシ。附子瀉心湯ヲ作リテ之レニ與フ。
夜ニ死ス。余其ノ故ヲ知ラズ。沈思スルコト數日、偶々傷寒論ヲ讀ミ、其ノ謂ユル藏結ナリ。余
當時、汎然トシテ思フ精シクセズ、誤鑿スルコト此クノ如シ。噫呼傷寒論ヲ讀ムコト十五年、甚
シイ哉、事實ノ周^ちラシ難キコトと記しおきて、篤胤も甚^{いた}く恥見し事三度あり。おとつとしの秋、
三十歳ばかりの男、もとより痲積の病ありて、一日大いに發り、諸醫藥を與へんといふものなし。
その父走り來りて余に診察を乞ふ。行きてみるに、腹裡拘急して其の痛み陰に引き、手足厥冷、
身體白汗出で、舌強^はりて云ふこと能はず、脈沈微なり。余その父に云ふ、こは古き醫經に藏結と
名づくる證にて、古人もこれを必死に屬し、とても生くべき道なく、譬へば西に入る日の、再び
中天に呼び返しがたきに等しと云へども、あはれその夕陽に等しき不治の病をも、生かさんと力
むること、わが醫の道の意なれ、かつ人息のあるらん程は、なか治を施さざらん。諸醫皆逃げ
ぬ。今はいかゞはせん。一てだてなしてんとて、山田田宗俊父の思ひつかれし關元の灸に、かね
て附子湯大劑二貼を調へ、自ら一貼を煮て飲ましめ、なほ怠りなくこれを用ひ、また事あらば云
ひおこしてよ、と云ひ置きて歸りぬ。時は未の刻ばかりなり。その夜子の刻すぐるころ、門を叩

きて、晝の薬は皆用ひ終り侍りぬ。今は手足もやゝ温まり、腹の痛みも軽くなれるよし云ひおこせり。いかで彼の證の見直すことあらんやとは思ひながら、其の夜は予もいたはることのありて、また診つひがはんともせず、かの附子湯また二貼を送り、あくろ朝行きて見るに、昨日とはかはり、苦痛も十に七八は減りて、今ほど粥二盛を喰ひたりとて、父の喜ぶ事限りなし。予はなほ更に悦ばず。こは張仲景の、死すと云ひ置ける證なるものを、いかで生くべき理のあらんやといふかしく、日々死ぬるを待つ心地しつゝ、これかれと意を盡しけるに、あやしきかなや、七日八日ばかり経て實に癒えたり。しか快くなりては、病家にてはさしも思はぬさまなれど、はじめこれこそは必死の證よと云へりしことの、心恥こづかしく思ひたりぬ。又此の彌生の初め頃、一婦人躋をめぐりて腹大いに痛み、裡急手を近づけがたく、冷汗脈微厥逆して、陰門の痛みことに甚し。醫者病家慌て騒いで、如何ともする事能はず、予に急を告ぐ。行きてこれを診るに、また藏結の證なり。固く断りて歸らんとするに、袂を取りて、さる必死の證あらんには、御薬咽に下りてすなはち死すとも、更に遺憾の候はず、まげて薬を賜はれといふに、辭みがたく、少しく思ふよしもあれば、當歸生姜羊肉湯に、附子を加へて與へたるに、吐して受けず。こゝに於て、童便少しばかりを入れて

少しづゝ與へ、大劑二貼を服さしめ、三時ばかりにして、手足少しく温まり、腹の痛みも漸に和らぎて、これも辛うじてまた癒えたり。おのれこゝに思ふやう、さては藏結といへども、心きたなく後見すべき證にあらずと、誇りかに思ひけるに、同年八月、一男年三十ばかりなるが、素より痼積ありて、他醫の薬を服みけるほど、甚く發りて、獨嘯の翁が記しおける證に少しもたがはず。前醫はこの證に恐れ、薬二貼を置きて、既に断り云へるよしなり。その薬を見れば、半夏瀉心湯ぶかりやうに茯苓ぶくりやうを加へたる方なり。家内の人、並びに予を勧めたりし人も、甚く恐れて死生いかどならんと問ふ。おのれこれもまた藏結なりとは思ひながら、前二人を癒したりしに心強く、ことに痛み陰の筋に入るの證もなく、精神も苦痛に合せては健にて、前二人に比べては、すこむる軽く覺えければ、その證危篤に似るといへども、さしも驚く計りの證にあらずと云へば、前醫の薬いかどあらんと問ふ。予云ふ、人の心の同じからぬ事その面の如く、醫者の病者に薬を與ふるもまた然り。此の方更におのが心にかなはずと云へば、いかに君の薬賜はらんやと云ふ。いと易き事なりとて、當歸四逆加吳茱萸生姜湯に芍薬と甘草をまして、三貼を置きて云ふやう、病苦堪へ難くはおはすらめど、明日は快くなり給はんと、たやすく云ひて歸りぬ。時は巳の刻ばかりなり。家内も、

おのが驚かぬを見て、始めて心落着きたるさまなり。かくて其の夜酉の刻過ぐる頃、あわたゞしく門を叩きて、かの予を勧めたりし人より消息して、晝の病人また甚く重れるよし云ひおこせたり。そはまた例のさしこみたるにやあらんと、急ぎに急ぎ走り行けば、人あまたつどひ、家内泣き騒ぎて、はや言切れたり云ふ。いかでさる事あらんと、いぶかしみつゝ立ち寄り診るに、實に死ねるにて、かくもはからひ見ばやと、施すべきやうもなし。おのれこゝに於て始めて驚き、さてはまた診察を誤れるなり。その誤れるが中にも、さきの二人は、必ず死ねべきものに云ひたるは恥なれども、おのが藥にて癒りたれば、恥かしながらも心苦しき事はなきを、こたびは夫と事かはり、死ぬべきものを、さしも重からぬ事に云ひて死にたるなれば、その心苦しきは言はん方なく、予誤れると思へば、人に顔見らるる心地して、殊に晝はあしらひよかりし人も、今は我を見下し居るおもちに思ひなされ、けさ伺ひ候ひし程は、今ほど斯かる事のあるべき證には候はざりしに、此れこそ急變と申すべけれなど、負けじ言云ひて鼠の逃ぐめると歸りたるに、其の夜は更に目も合はず、あすよりは此の業を止めてんなどさへ思ひ煩ひ、また思ひ直しもして、とにかくに寝ねかねて、傍なる筆と硯引き寄せて、この行く先の心得にとて、記しつけおくなり。文化四年歟。

入學問答

○或人問ひて曰く、貴所の教導いたされ候學風を、古學と稱し、その祖述せられ候道を、古道と稱せられ候事、是は何の程に、誰が創め候學風にて、如何なる事を學び候事に候や、また和學に古學と云ふ事は、儒學に古學起り候に倣ひたる名稱のやうに申し候者もこれあり候。此等の事委しく承り度候。

答へて曰く、御尤もの御尋ねに候。抑々古道と申し候は、何の事もなく、古への道と申す事に、其は 天皇祖神の、この天地を御造りなされ候を始め、

天皇祖神の、天地を造り給へる事は、古史傳、また靈の眞柱に委しく論へり。披き見るべし。

さてその 天皇祖神とは、漢土籍に、天帝、上帝、皇天など云へる是なり。この事は鬼神新論

に云へり。

上代の事實の上に備はり候眞の道を、聊かも外國風の説を混へず、純粹なる古意古言字を以て素直に説き明し、其の事實の上にて、天皇命の、天下を治め給ふ御政の本をも、人道の本をも知り候學問故、古學と申し、その道を指して古道とは申し候事に候。

序なれば申し候。一體眞の道と申し候ものは、實事の上に備はり有るものにて候を、世の學者等は、とかく教訓の書ならでは、道は得られぬ事のやうに心得居り候へども、甚の誤に候。其の故は、實事が有れば教はいらず、道の實事が無き故に教は起り候なり。されば教訓と申すものは、實事よりは甚だ卑ひくきものに御座候。老子の書にも、「大道廢れて仁義あり」と申し候は、此をよく見抜き候語に候。但し、老子の此の語を、儒者は左道のやうに申しなし候へども、孔子の語にも、これと同様の事これ有り候。それは禮記に、「大道ノ行ハル、ヤ、謀閉ヂテ興ラズ。竊盜亂賊モ作ズ。今大道既ニ隱ル、禮義ヲ以テ紀ト爲シ、以テ君臣ヲ正シ、以テ父子ヲ篤クシ、以テ兄弟ヲ睦ジクシ、以テ夫婦ヲ和ラゲ、以テ制度ヲ設ク」と見え候なり。此等にて御合點あるべく候。殊に教と申すものは、人の心に親しく染まぬものに御座候。其は近く申し候

はば、武士の心を勇め候に、軍に出でては先駈さきかひせよ、人に後れなと記し候教の書を見せ候よりは、古への勇士等の、人に後れず、先駈高名したる事實の軍書を読ませ候方が、深く心に感じ入り候て、我も事に當りては、昔の誰々が如くならんと、猛き心の振り起り候へども、教訓の書にては、さしも憤慨の志は發たらぬものに御座候。かの、君の仇には俱に天を戴かず、など申し候教へ言よりは、大石内藏助などが、千辛萬苦の難儀をして、吉良殿を討ちたる事實の、身にしみじみと髪も逆立ち涙もこぼれ候程に、感じ入り候にて察せらるべく、是は誰も覺え有るべき事と存じ候。なほ申し候はば、教と云ふものは、其の心さま、其の人となりの善からぬ者の申し置き候訓へ言といへども、書に記し有る所は尤もらしく見え候ものにて、漢土の教訓書にはそれが多く候。或は君を弑して國を奪ひ候者などの言ひ置き候教へ言にさへ、金科玉條と云ふべき事ども御座候へども、其の行の實を察候へば、主殺し國賊に候故、其の尤もらしき教へ言どもは、皆口先の空言に御座候。世の學者等の、斯様の意味をば夢にも知らず、教訓を書きたる漢籍によらでは、道は得られぬ事と思ひ居り候は、片腹痛き事に候なり。漢土にても、此等の趣をよく心得候は、まづ孔子一人のやうに相見え申し候。さてこそ其の申し候語に、「我

之ヲ空言ニ載セント欲スルニ、之ヲ行フ事ノ深切著明ナルニ見ハスニ如カザルナリ」と申し候ひき。孔子は此の心に候故、教訓の書とては一部一冊も作らず、たゞ春秋をのみ調べ正して、此の記録を読むときは、自づからに惡を懲し善に勸み候やうに書き取り候事にて、孔子生涯の骨折と云ふは、この春秋に候なり。其故、「我が志春秋に有り」とも、また「我を知る者はそれ惟春秋か。我を罪する者は其たゞ春秋か」とも申し候なり。斯様に心を籠めて撰み候書故、漢籍にては、春秋ほど實の有る書は無く、孔子の心によく見え候は、此の書に越し候もの御座なく候。然るを世の儒者など、儒書の上にも、此の如く著明なる意味のこれある事を辨へず、只々教訓を記し候漢籍に據らでは道は知られぬ事と、狭く心得候は、吾が本尊と致し候孔子の本意を會得せず、春秋をよく讀まぬ誤にて候なり。春秋を熟讀いたし、孔子の意をよく得候へば、此方の學風に不審を起し候事一つも御座なく候なり。

扱又、古道と申す言の物に見え候は、皇極天皇紀に、「天皇古道ニ順考シテ政ヲ爲シタマフナリ」と御記し遊ばされ候が始にて、此の 天皇の、古道に順考して御政を爲し給ひ候事は、その御紀を拜讀して知らるべく候。

すべて道の本は、古へに稽^{かむ}へ求め候が眞の事にて、既に漢籍にも、尙書の說命に、「古訓ヲ學ベ乃チ獲ルコト有リ。事古ヘヲ師トセズバ、以テ克ク世ヲ永クスルハ匪ズ」と見え候を始め、孔子もかゝる類の語は、しばしば申し候ひき。古へに稽^{かむ}へ徵せず道を説き候は、謂はゆる無稽に候なり。たゞ政事のみならず、德行言語文學も、皆これより出で申し候。苟くも此の道に據らず候事は、すべて無稽と申し候はんも非言^{ひがふ}ならず候。

又、この學風の起り候事は、東照宮の御神徳に依りて、その御孫、水戸中納言光圀卿の、やゝ其の糸口を御開きなされ候事にて、

但し、東照宮の御神徳に依る事なる由は、別に委しく記し奉れるものある故に、今は大略いたし候なり。

其の頃には、唯々外國の學びを爲る者のみ有りて、皇朝の上古の事などをば、専らと學び候者のこれなき事を、光圀卿深く慨^{うた}み歎かせ給ひ、皇朝の學問を第一として、數多の學士を御招きなされ候て、有らゆる古事は本より、國々の 神社佛閣、及び民間までを御尋ねなされ、古文書の類をば、少^{いさ}かの物をも集めさせられ、其を明細に順考し給ひ、神武天皇の大御世より、後小松天皇

の御世まで、御代は百代餘り、年數二千餘年の事實を、委しく御撰びなされ、大日本史と云ふ史、二百四十卷を御作りなされ、又、堂上方の世々の記録を始め、數百部の古書の中より、朝廷の御禮儀に關りたる事等を類聚せられ候て、五百餘卷の書と爲し給ひ、右二書、御大業の御入用として、御高三十五萬石の内、三萬石を分け置かせられ、

一説に、五萬石とも云ひ、或は七萬石とも云ふ。

數十年の御心勞にて、遂に御成功なさせられ、朝廷へ進獻られ候所、叡感斜ならず、右五百卷の御書をば、禮儀類典と題名を勅し賜はせられ候。

又其の頃、攝津國難波に契沖と云ふ人これ有り。此の人、故ありて眞言僧とはなりたれども、厚く我が古を信じ學び候て、中つ世より誤り亂れ候古言の假字遣ひを、古書に徴してこれを糺し、和字正濫抄と云ふ書を著はし、此の餘にも、種々の書を著はして、其の名高く、光圀卿の御耳に入り、殊の外に感じ思召し、御地へ召され候へども、契沖の辭退申せし故に、御内人安藤爲章（號を年山と云ふ）と云ふを、その門人に遣はされ、かつ萬葉集は、奈良の御世の古き歌集にて、歌のみならず、博く古を考ふるに、助となる書なれども、其の頃まで、世に有る所の注解は、何

れも宜しからねば、古に叶ふべき注を、仕るべき由を、御頼みなされたる所、契沖畏まりて、萬葉集の代匠記と申す注解の書、五十卷を作りて、さし上げられ候。是が抑々我が萬葉學の創めに候なり。光圀卿、その書の卓見を殊の外に御滿悦有りて、御自分の御考へと共に、御大成なされて、釋萬葉集と云ふ書、五十卷を御作りなされ候とぞ、

此等の事、委しくは爲章の年山紀聞、千年山集などを見て知らるべく候。

さて契沖は、元祿十四年正月廿五日、行年六十三歳にて身まかりたるが、其の著書凡べて二十五部、卷數百二十卷餘あり。

此の人に追ひすがひて、荷田東麻呂（通名は羽倉齋宮）と云ふ翁の出られ候て、大きに皇國の學問を弘められ、既に公の御免を蒙り、御國學びの學校を、京都東山に建てんと、其の地をトせられ候に、其の事果さず、病に依つて身まかられ候。此の翁も著書五部、百卷餘りこれあり候。

此の翁の著書は、故有りて、世に傳はれるもの少なけれども、凡べて吾が古學の規則は、此の翁にて相立ち初め申し候。

此の次に、賀茂眞淵翁（通名を岡部衛士と稱し、家號を縣居と云ふ）の出られ候て、是は荷田翁

の上を、一層高く見解を爲し、始めて、古の道を明らかに知らんとするには、漢意佛意を清く捨て果てざれば、其の眞を得がたく、歌を詠むも、古言を解釋するも、凡べて古道を明らむべきなる由を言ひ誨され候。

此の事は、萬葉集の大考、また、にひまなび、また國意考などを見て知らるべく候。

後に、田安中納言殿に召し出され、皇國學の御師範を申し上げられ、世に普ねく古學の弘まり候は、全く此の翁の力にて候。明和六年十月晦日に、七十二歳にて身まかられ候。其の著書すべて四十九部、卷數百卷ほどこれ有り候。

此の次は、この篤胤が師と仰ぎ候、本居宣長翁（通名を中衛と稱す。平姓なり。家號を鈴屋と云ふ）に御座候。此の翁の學問のいみじき事は、實に生民有りてより以來、比類これなく候。但し斯様申し候はば、師に心酔の餘り、稱め過ぎ候やうに思し召さるべく候へども、是は天下の公論に御座候事、唯今申す迄もなく、其の著はし置かれ候書どもを、熟讀せられ候て、篤胤が過言ならぬ事を察せらるべく候。此の翁は紀伊中納言殿へ召され候て仕へられ、享和元年九月廿九日、七十三歳にて身まかられ候。其の著書すべて五十五部、百八十卷餘これ有り。何れも學問する者

の、常に左右を放れぬ書どもにて、一部一冊として、學者の規則とならぬ書はこれなく候。

なほ右に申し候翁たちの傳、及び其の著はされ候書等を、是は如何なる事を記せるものと云ふまで、詳かにいたし候は、吾徒堤朝風と申す人の撰び候、古學道のしをりと云ふ書に、篤胤が増補いたし候ものこれ有り、それらを見て知らるべく候。

さて我が古學の本は、畏くも東照宮の御神意に依りて、光圀卿の御開きなされ候へば、いかで其より後に起り候古文辭家の儒者の、謂はゆる古學に倣ひ候名稱と申すべきや。強ひて申し候はば、儒者の古學と申し候が、此方の古學の起り候を見て、相眞以候事ならんも知るべからず候。さて此の古を學び候を、世人和學と申し候事、甚だ以て不相當なる名稱に御座候。其の故は、吾が師の玉がつま、また、うひ山踏などに論じ置かれ候如く、世に學問と申し候は、漢學の事を申し候て、皇國の古へを學び候を、分けて神學、和學、國學など申すは、すべて漢土を宗として、御國を傍にいたしたる言ひさまにて、斯くは有るまじき事に候へども、古へはたゞ漢籍の學びのみこれあり、御國の學びを専らと致す者はこれなく候ひし故に、自づから斯様に申し習ふべき勢ひに候。然れども、近き世となり候ては、皇國の學びを専らといたし候徒も多く候へば、漢籍の

學をば分けて漢學とか、儒學とか云ひ、此の皇國の學びをこそ、宗と唯に學問と申すべき事に候なれ。佛學なども、他よりは別けて佛學と申し候へども、法師の徒は唯に學問と云ひて、佛學とは申さず候。これは實に然有るべき理に候なり。和學と申し候へば、外國にて、此の御國の事を學び候事に相成り候なり。能く御合點有るべく候。

此の事は、篠崎東海と申し候儒者の、和學辨と申すものにも論じ置き候が、尤もなる事に御座候。

又、國學と申し候へば、尊ぶ方にも取りなさるべく候へども、國の字も事にこそ依れ、猶うけはらぬ言狀いひさまに候なり。世の人の物云ひさま、凡べて斯様の詞に、内外の辨へを知らず、外國を内に爲たる言のみ常に多く候は、漢籍をのみ讀みなれ候故の非言ひがよに候。是ら尤も關係の大きな事に候故に、御問の詞に和學とこれあるに付きて、先づ申し候なり。

○問ひて曰く、然らば、その皇國の學びを致し候には、いかゞ學び入り候て宜しく候や。また漢學の諸派に分り候如き事も御座候にや。此等の趣つぶさに承り度候。

答へて曰く、世に學問の筋あまたこれ有る中に、皇國の學問ほど廣大なる學問はこれ無く候へど

も、世の人さしも思はず居り候事故、御問につきて、まづ諸々の學問の大抵を申し候て、さて皇國の學問のいたし方を申すべく候。それはまづ此方の祖述いたし候古學を、巨細こまかに分け申し候へば、七つ八つに相分り申し候。まづ神道を宗と學ぶ一派あり。また歌學といふ有り。又律命の學、さては國史の學、または物語書の學、さては故實諸禮の學、また武士道の學が一派あり。この中にも、俗にいふ神道と云ふに諸派あり。歌學にも二派三派あり。又故實の學にも二派三派御座候。さて儒者の學び候漢學にも、經書の學、歴史學、諸子の學、詩學など云ふを始め、種々に派が分り、また佛學、これは諸宗ありて、各々其の宗旨たがの差ひ候上は、學び方も差ひ候は申す迄もなく、また、その佛道儒道を以て作り建て候道學、また心學など申し候生ちよこ才なる學、又天文地理の學び、さては近頃始まり候蘭學、また醫者の學問にも種々の差別これあり候。斯くの如く、學問は種々御座候中に、何の學問が廣大なると申すに、我が古學ほど大きな學びはこれ無く候。其の故は、近く儒學と佛學との上にて申し候へば、儒者はまづ四書五經とか十三經とか云ふ類の書を生濟ましにも讀む事を覚え、また左國史漢の史籍をあらあら讀み覚え、さて漢文を綴るすべを學び、其の常のさへづり種くさに詩を作る事など覚え候へば、御儒者様にて通り候。貴公にはいま

だ漢學をのみ致され候事故、御怒りもあるべく、是は甚だ大言のやうにも思はるべく候へども、心を平らかにして御考へなさるべく、大概の儒者が皆此のくらゐのものに候なり。扱その儒生に比し候ては、僧徒の學は餘程廣きものに御座候。其の故は、渠等が是非に讀まんと致し候佛書、謂はゆる一切經が五千餘卷これあり。尤もそれを十分一讀みても、右に申す儒者の専らと讀み候書の一倍もこれ有り。其の上に儒生は佛書を見ずとも事缺けず候故、讀み候者少く候へども、僧徒は、儒者の宗とする書をば、文字を知る爲めに、小僧の時より讀み覚え、詩も漢文も儒者と同じやうに作り覚え候故、却りて儒者より弘く書を読み候事、これにて御察し有るべく候。また、皇國の學問ほど廣大なるは無しと申す故は、右申し候如く、儒學佛學を始め、種々の學問これあり候て、其の道々の意と事とが悉く、皇國の學びごとに混入いたし候て、譬へば大海へ諸々の川々より落ち來る水の交り居り候如くにて、人の心も多くそれに移り、彼れを非とも此れを是とも別ちかねて惑ひ居り候なり。それ故その混雜を具に別ち候はでは、眞の道の尊き事も顯はれ難く、扱その混雜を能く別たんと致すに付きては、彼をも己をも能く知らでは申し難く、また外の道々の古道に害となる由を申し諭さんと爲るに付きては、譬へば、僧徒等の説き候道の非を呵責いた

し候には、佛書に依りて申し候へば、言句も出ず、漢學者の非説を諭し候には、經書の説、さては孔子の語にて申し候へば、猫に逐はれし鼠の如く畏まり居り候。外の道々も是に準へ御察し有るべく候。かの蘇子由と申し候者の云へる語に、「善ク人ト云フ者ハ、其ノ人ノ言ニ因ツテ之ガ言ヲ爲ストキハ、則チ天下ノ辨者モ服ス。其ノ里人ト云ヒテ曰ク、吾ガ父以テ然ラズト爲ストキハ、則チ誰カ肯ヘテ信ジテ以テ爾ノ父ヲ是ト爲サム、云々、夫ノ異端ヲ排シテ終ニ以テ明カナラザルモノハ、惟其ノ是非利害ヲ辨ズルコトヲ務メズシテ、其ノ父ヲ以テ人ヲ屈スレバナリ」と申し候如く、凡べて異端を辨じ候に、家言を以て申し候ては、屈伏いたさざるものにて候を、先の家言を以て辨じ候へば、謂はゆる我が室に入り、我が棒を以て吾を撃ち候事故に、屈伏いたし候事に候。皇國の純粹と正しき道を説き明さんとする學問ほど廣大なる學びはこれなくと申し候故は、あらあら此くの如くに御座候。殊にもるも學問の道は、たとひ外國の學びに候とも、其のき事は選びて、御國の用に致さん爲めに學び候事故、實は漢土、天竺、游蘭陀の學問をも、凡べて御國學びと申し候ても違はぬ程の事にて、是が御國人にして外國の事をも學び候者の心得にて候。若しこの意味を心得誤り、世の儒生等が如く、漢土を本とし、御國を末と致し候はば、道

の罪人にて、儒道を以て申し候ても、春秋の尊内卑外の旨と相反し、謂はゆる左道の學者に候なり。

○問ひて曰く、然らば、その古道を學び候には、まづ何書より學び候て宜しく候や。其の次第御示教賜はり度候。

答へて曰く、日本紀は、御正史に候へども、初心の者には紛らはしき事も御座候へば、まづ初めに古事記を熟く御學びなさるべく候。但し此の書は、太朝臣安麻呂主の表序に記され候如く、長くも、天武天皇の深く厚く思し召し立たせ給ひて、古意古言を、上代の儘に傳へんと、御自から重んじ選ませ給へる御典に候が、容易くは解し難く入り難き事故に、古へより註解とても是なく候所、先師本居翁、始めて此の御典の、古道を學び候には、宇宙第一なる事を發明いたされ、數十年の功勞を積みて、古事記傳四十四卷を選み著はされ候より、世の人始めて此の書を解し候事を覚え、その尊き事をも知り候事に御座候。その古事記傳の首卷に、すべて古事どもの論、また此の書の讀法、また世の人の日本書紀をのみ尊み、此の書の尊き謂れを知らざる事、及び其の御撰みありし御趣意、また日本書紀の論、また古道の趣をも精密に説き明され候。此を熟讀せられ

れ候へば、古道の上もなく尊き事は知らるべく候。先師生涯の著書五十部餘これ有り候へども、多くは此の書を作られ候枝流餘材に成り候物に御座候。其中二つ三つを申し候はば、古言の正音を論辨せられ候に付き、諸外國の音韻を明辨せられ、禽獸萬物の音韻迄も論じ及ばれ候て、漢字三音考を著はし、また皇國の音のしるしに漢字を借り用ひ候に付きは、其の字音の然る所以を明らめて、字音假字用格を著はし、また、その漢字音を借りて國名に用ひ、牟邪志の邪志に藏の字の音を轉じ用ひて、武藏と書き、佐加良加に相樂と書くなどの所以を辨じて、地名字音轉用例を著はされ候。此の三書を熟讀せられて、吾が師の音韻の學の精密にして、往昔より此の學を専門と致し候輩も、吾が師の音韻學に比べては、片手の力にも及ばざる事を知らるべく、又、古言の言ひさま使ひさま、其の結びの氏爾遠波を明辨して、詞の玉緒七卷を著はされ候。此の書の尊き事、堂上地下ともに、詞花言葉を學ぶ者は、誰も掌中の玉に比して、規則と致し候にて御察し有るべく候。また上古より、近く天正慶長の頃まで、漢土と通信ありし事どもを、年を追ひてこれを考へ、かの國籍の妄言、及び皇國の書にも誤り多く、かつ内外の差別正しからず、甚だ國體を損じ候事どもの候を、逐一に實を考へ名を正し、尊内卑外の理を委曲明細に論辨せられ候

て、馭我概言四卷を著はされたり。此は後の世四海の蕃國を統御し給ふ 皇國の御規範とも申すべき書にて御座候。是等すべて古事記傳の枝流餘材に成り候へども、悉く世の癖學者流の心肝に硲して睡を覺まさせ候書どもにて候。此の外に、數十部の書も、是に準へて知らるべく、其の中にも、今は古道を學び候に、まづ早く讀むべき書等を申し候なり。

さて古事記傳四十四卷を熟讀玩味せられ候上にて、上件申し候書どもを融會貫通して讀み明らかられ候へば、始めて舊來の非を覺え、雲霧を排きて、漸に白日を見初め候心地に相成り申し候。此の時に、日本紀を御讀みなされ候へば、紛らはしき所なく、古事記に勝りて甚委しく明らか、實に 皇朝の御正史たる所以も能く知らるべく候。扱此の次に、萬葉集を御學びなさるべく候。かやうに讀むに、序次を立て候所以、また其の讀むべき心得等の事は、具に先師著作の、うひ山踏と申す書に誨し置かれ、猶漏れたる事は、篤胤が別に記したるものもこれ有り候へば、今遂一には申し述べ候。斯くの如く、篤實動行に相學び候上にて、始めて俱に古道を談られ候事に御座候。但し斯様に書は御讀みなされ候ても、一點も漢意の習氣相残り候へば、道は見え難く候なり。此の事は、右申し候先師の書どもに、委曲論し置かれ候へども、是は道を得るも得ざる

も、此の意一つに關係いたし候事故、申し候なり。師は人を諭すごとに返すく、此の事を申し候て、或人に贈られ候手簡にも、「皇朝の古道御執心の段、何よりも悅敷存じ奉り候。唯々漢の習氣を除き候事第一儀と存じ候。此の習氣甚だ抜けがたき物に御座候」と云はれ候なり。

○問ひて曰く、御國の學問を致し候へば、外國の事をば學ばずとも宜しく御座候や。

答へて曰く、隨分に御學びなさるべく候。凡べて世の古學者流、儒者佛者の吾が道をのみ狭く域りて、他を知らざる管見をば笑ひ居り候へども、吾も亦、吾が古學をのみ知りて、固陋なる事を顧みず。それ故わが聞き知らぬ外國説を聞きては、驚き惑ふ者も間々これ有り。身方より見るに、心苦しく候故、拙子が弟子を教授いたし候には、その倭心を堅固に致し候上にては、手の及ぶ限り、他をも能く學び候やうにと誨し候事に御座候。其の故は、凡べて外國々の説、また他の道々の意をも、能く尋ね比考いたし候はでは、我が道の實に尊き事を知らざるにて候へばなり。外の道々をもよく知り候上にて信じ候こそ、實に知りて信ずると申すものに候なり。拙子は右の心得に候故に、他の道々の意、及び其の説々をも及ばん限りは明らめんと致し候事に候。されば、儒學佛學蘭學に依らず、何にても他の道々を御精究なさるべく候。師も、うひ山踏に「漢籍をもま

じへ讀むべし。學問の爲めに益多し。倭魂だに熟く堅固りて動く事無ければ、晝夜漢籍をのみ讀むといへども、彼れに惑はさるる患はなきなり。然れども、世の人とかく倭魂かたまり難きものにて、漢籍を讀めば、其のことよきに惑はされて、たじろき易きならひなり。ことよきとは、其の文辭を麗はしと云ふには非ず。詞の巧みにして、人の思ひ付き易く、惑はされ易きやうなるを云ふなり。凡べて漢書は言巧みにして、物の理非を賢く云ひ廻したれば、人のよく思ひつくなり。凡べて學問筋ならぬ、世の常の世俗の事にて、辯舌よく賢く物を云ひ廻す人の言には、人の靡き易きものなるが、漢籍もさやうなるものと心得居るべし」と申し置かれ候なり。

○問ひて曰く、然らば漢籍は、いかゞ學び入り候て宜しく候や

答へて曰く、漢學の致し方は、まづ初人は、文字を見覚え候迄の事故、世の並に、四書五經の句讀を授かり、文字を記憶致し候上にて、伊藤東涯の著書等を御覽なさるべく候。其の故は、漢學にも、朱子學、陽明學、古學など、宗派相分り候へども、朱子學は既に先輩も論じ候如く、古へに叶はず。二程氏——朱熹、その世に普ねく佛道の流行いたし候て、儒學の廢れ候を歎き、我が道も斯くの如しと、世に示さんとての所爲に候が、佛意を以て建立いたし候學風にて、孔子の正

意に相合はず、全く新説に候へば、新學と申し候事、その謂れある事に候なり。また陽明學は、實に王氏が學にて、是また孔子の正意に叶はず候事、論ずるまでもこれ無く候。次に、御國に於て、古學と申し候に二派これ有り。一は伊藤仁齋に起り、其の子東涯これを繼ぎて、ますます委しく、一は荻生徂徠に起り候て、門人太宰純が輩これを繼ぎて説きひろめ候。此の二派を並べ考へ候に、徂徠が學は、古學とは稱へ候へども、多く漢儒の説に依りて建立いたし候故、實は古學とは申しがたく候。其の文章も、古文辭などと申し候へども、韓柳を祖といたし候へば、眞の古文とは申し難く、殊にわざと黠屈なる語を拾ひ綴りて、人をおどし候など、實は見解もいと卑き事に候。但し性質恰利の男に候ひしかば、其の著書、論語徴を始め、間々取るべき事も候へども、書き遺し候説の中には、害になり候事多く候へば、まづは無用の書どもに候なり。次に太宰純が書どもは、大抵一部一冊として有用の物なくと思し召さるべく、實は此の者の云ひ置き候言どもは、志ある者の風上にて讀み上げ候も穢らはしき事に候なり。荻生、太宰等が學は、決して孔子の本意に叶はず、世に漢國を稱め尊み、御國を卑しめ譏り候儒者どもの多くなり候は、全く此の者どもの學の起り候より初まり候事に候。なほ朱熹、陽明、荻生らが學の、云々の謂れに依

りて悪しきと申す事までを、委しく申したく候へども、旅中の事なれば、心も忙がはしく、其の概略をのみ申し候なり。

文化十年正月

與 埴 辨

文政五年五月の始め、伊豆國の海邊に、伊岐理須いせりすといふ我國の漁船寄り來て、其の船人の言に、水の盡きたる故に乞はんとて、船を寄せたる由申せるなど世に聞え、また其の船人共の、よく此の國邊の針路を知りたる趣なども聞き傳ふるに、正しき漁舟とは思はれざる事共あり。殊に彼の國人の、年久しく我が國を闕ふ由は、聞き傳へて在れば、拙き心にも思ふ旨ありて、「大君に神の依よさせる我國わがくにの果ては御國みくにの御馬飼みまかひの國」と密かにうち詠めて在りけるに、また此の頃聞けば、其の異國人どもの中に、海中にて飲水を失ひ、數日海潮飲みたる故に、煩ふ者多ければ、其の療治に赤土入用なり、賜はるべしと願へる故に、其の地の赤土を幾樽とやらん贈りしかば、其の土を用ひて、彼の病人共を療しけるに、皆速かに癒えて歸れりと云ふ沙汰もあり。これ實ならば、

其の邊の土民などの、事を辨へざる者ども、船の寄り着きて、未だ有司の人々にも訴へざる間に、船中に實に病人あるを見、かつ早く賜へと切に乞ひけん故に、何の心もなく贈れるなるべけれど、外國人などに土を取らする事は、宜しからぬ例とする事なり。今の世にも、國中にてすら、老農など互ひに我輩作る田畠の土を、他人に取らす事は、よからぬ例とするにても知るべし。是を以て、今古き書の事實を此に拾ひ舉げて、其の本の由縁を知らしめんとす。

日本紀第三、神武天皇御即位前の、戊午年の所に、二月丁酉朔丁未、皇師遂ニ東シテ舳艫相接ス云云。九月甲子朔戊辰、天皇彼ノ菟田ノ高倉の山ノ嶺ニ陟リマシテ、域中ヲ瞻望リタマフ（印本「域」ヲ「城」ニ誤マル。今一古本ニ據リテ之ヲ改ム）。時ニ國見岳ノ上ニ則チ八十梟帥有リ「帥」印本「師」ニ作ルハ誤リナリ。又、女坂ニ女軍ヲ置キ、男坂ニ男軍ヲ置キ、墨坂ニ焮炭ヲ置ク。其ノ女坂、男坂、墨坂ノ號ハ此ニ由ツテ起レリ（「其」ノ字印本「具」ニ誤マル。今古本ニ據リテ之ヲ改ム）。復、兄磯城ノ軍有リテ、磐余邑ニ布滿メリ。賊虜ノ據ル所、皆是レ要害ノ地ナリ。故ニ道路終エ塞ガリテ通ルベキ處無シ。天皇之ヲ惡ミタマヒテ、是ノ夜自ラ祈ヒテ寢リタマフ。夢ニ天神有リ、訓ヘマツリテ曰ク、宜シク天香山ノ社ノ中ノ土ヲ取リテ、以テ天平瓮八十

枚ヲ造リ、並ニ嚴瓮ヲ造リテ、天神地祇ヲ敬マヒ祭リタマヒ、亦、嚴咒詛ヲ爲シタマヘ。此クノ如クシタマハバ、則チ虜自ラ平伏ハント。天皇祇ミテ夢ノ訓ヘヲ承ケタマヒテ、依ツテ將テ行ハントシタマフ。時ニ弟猾又奏シテ曰ク、倭ノ國磯城の邑ニ磯城ノ八十梟帥有リ。又高尾張邑ニ赤銅ノ八十梟帥有リ。此ノ類皆天皇ト距ギ戰ハント欲ス。臣竊カニ天皇ノ爲メニ之ヲ憂ヒマツル。今當ニ天香山ノ壇ヲ取リテ（「今」ノ字ノ上ニ、印本「宜」ノ字有ルハ衍ナリ）、以テ天平瓮ヲ造リテ天社國社ノ神ヲ祭り、然ル後ニ虜ヲ撃チタマハバ、則チ除キ易ケムト。天皇既ニ夢ノ辭ヲ以テ吉兆ト爲シタマヒ、弟猾ガ言ヲ聞シメスニ及ンデ、益々懷ニ喜ビタマフ。乃チ、椎根津彦ヲ著テ（印本「使」ノ字ヲ脱ス。今二古本及ビ舊事記ニ據リテ之ヲ補フ）、弊レタル衣服及ビ蓑笠ヲ著セシメテ、老人ノ貌ト爲シ、又、弟猾ヲシテ蓑ヲ被ラシメテ、老嫗ノ貌ト爲ス。而シテ之ニ勅シテ曰ク、宜シク汝二人、天香山ニ到リ、潜カニ其ノ巔ノ土ヲ取リテ來リ旋ルベシ。基業ノ成否ハ當ニ汝ヲ以テ占ト爲ス。努力慎シメト。是ノ時、虜ノ兵路ニ滿ミテ、以テ往還ヒ難シ、時ニ椎根津彦乃チ祈ヒテ曰ク、我が皇、當ニ能ク此ノ國ヲ定メタマフナラバ、行カム路自ラ通ゼン。如シ能ハズバ、賊必ズ防禦ギナント云ヒ訖リテ、徑チニ去ク。時ニ群虜二人ヲ見テ、大イニ哄ヒテ曰

ク、大醜おほなみにくヤ、老父ト老嫗トト。則チ相ヒ與ニ道ヲ闢ひらリテ行カシム。二人、其ノ上ニ至ルコトヲ得テ、土ヲ取リテ來リ歸ル。是ニ、天皇甚ク悦ビタマヒテ、乃チ此ノ埴はヲ以テ八十平瓮、天手扶あまのたたくじりノ八十枚ノ嚴瓮いづべヲ造作つくリテ、丹生ノ川上ニ陟のぼリテ、用ヒテ、天神地祇ヲ祭リタマフ。則チ彼ノ菟田川ノ朝原ニ於テ、譬たとヘバ水沫ノ如クシテ呪かじリ著ク所有ラント。天皇又因リテ祈うけヒテ曰ク、吾今當ニ八十平瓮ヲ以テ水無キニ飴あまヲ造ラン。飴成ラバ則チ吾必ズ鋒刃ノ威ヲ假ラズ、坐シテ天下ヲ平ゲント。乃チ飴あまヲ造ル。飴即チ自ラ成ル。又祈ヒテ曰ク、吾今當ニ嚴瓮いづべヲ以テ丹生ノ川ニ沉メシ。如シ魚大小ト無ク悉ク醉ウテ流ルルコト。譬たとヘバ猶なほ椀まノ葉ノ浮キテ流ルルゴトクアラバ、吾必ズ能ク此ノ國ヲ定メン、如シ其レ爾しかラズバ、終ニ成ル所無ケン。乃チ瓮いづべヲ川ニ沉ム、其ノ口下ニ向ケリ。頃しほ之らくシテ、魚皆浮キ出デテ、水ノ隨まニあ嘷あざとフ。「頃」ノ下ナル「之」ノ字、一本ニ據リテ之ヲ補フ。時ニ椎根津彦見テ之ヲ奏ス。天皇大イニ喜ビタマヒテ、乃チ丹生川上ノ五百箇ノ眞坂樹まさかきヲ拔キテ、以テ諸神ヲ祭リタマフ。此ヨリ始メテ嚴瓮いづべノ置すま有リ。云々。十月癸巳朔、天皇其ノ嚴瓮いづべノ糧あめのつてまつヲ嘗あリテ、兵ヲ勒とくヘテ出デテ先ヅ八十梟師ヲ國見の岳ニ擊チテ、破リテ之ヲ斬ル。云々。十一月癸亥朔己巳、皇師大擧シテ云々擊チテ之ヲ破リ、其ノ梟師兄磯城等ヲ斬ル云々。

これ天皇、天祖神の御誨のみそとに依りて、咒咀かじりの事を知り給ひ、賊地の埴はを取りて、遂に賊を亡し給へる例なり。埴はすなはち赤土なり。

同紀第五、崇神天皇十年の處に、九月丙戌朔甲午、大彥命おほひこヲ以テ北陸ニ遣ハシ、武渟川たけなほ別わかヲ東海ニ遣ハシ、吉備津彦ヲ西道ヘ遣ハシ、丹波道主命ヲ丹波ニ遣ハシ、因ツテ以テ詔みことりシテ曰ク、若シ教ヲ受ケザル者有ラバ、乃チ兵ヲ擧ゲテ之ヲ伐テト。既ニシテ共ニ印綬いんじゆヲ授ケテ將軍ト爲シタマフ。王子、大彥命、和珥坂ノ上ニ到ル時ニ、少女有リ。歌ヒテ曰ク、御間城みまき入彦ハヤ、己ガ命ヲ弑ころセムト、盜ぬすマク知ラニ、姫遊ひめあそビスモ。是ニ大彥命之ヲ異あシミ、童女ニ問ヒテ曰ク、汝ガ言ハ何ノ辭ことゾ。對こたヘテ曰ク、言フコト勿なシ、唯歌フノミト。乃チ重ネテ先ノ歌ヲ詠うたフ。忽チニ見エズナリヌ。大彥命おほひこ（印本此ノ「命」ノ字ヲ脱セリ。古本ニ據リテ之ヲ補フ）、乃チ還リテ具サニ狀ヲ以テ奏ス。是ニ天皇ノ姑倭迹みまは迹ま々ま日百襲よひも姫命ひめのみこと、聰命あき叡智、能ク未然ヲ識ル。乃チ其ノ歌ノ恠あヲ知ル。天皇ニ言サク、是、武埴安彦たけは安彦やすひこガ謀反セントスルノ表ナリ。吾聞ク、武埴安彦ガ妻、吾田媛あだひめ密ひそカニ來リテ倭ノ香山ノ土ヲ取リテ、領巾ひれヲ裹つミ（印本「頭」ノ字有ルハ衍ナリ。今水府本ニ據リテ之ヲ刪けル）、祈うけヒテ曰ク、是レ倭ノ國ノ物實ト。乃チ反ル「乃」ノ字、印本「則」ニ作ル。今

古本及び水府本ニ據リテ之ヲ改ム。是レヲ以テ事有ルコトヲ知ル。早く圖ルニ非ズンバ必ズ之ニ後レン。是ニ於テ、更ニ諸ノ將軍ヲ留メテ之ヲ議ル。未ダ幾時ナラズシテ、武埴安彦、妻吾田媛ト反逆ヲ謀リ、師ヲ興シテ忽チニ至ル。各々道ヲ分チテ 夫ハ山背ヨリ、婦ハ大坂ヨリ、共ニ入リテ帝京ヲ襲ハント欲ス。時ニ天皇、五十狹芹彦命ヲ遣ハシ、吾田媛ノ師ヲ撃チ、即チ大坂ニ遮リテ、皆大イニ之ヲ破リ、吾田媛ヲ殺シ、悉ク其ノ軍卒ヲ斬ル。復、大彦命ト和珥臣ノ祖彦國葺トヲ遣ハシテ、山背ニ向ヒテ埴安彦ヲ撃タシム。爰ニ忌登ヲ以テ、和珥ノ武録坂ノ上ニ鎮ヒ坐エ、則チ精兵ヲ率キテ、進ンデ那羅山ニ登リテ軍ス。云々。更ニ那羅山ヲ避ケテ進ンデ輪韓河ニ到リ、埴安彦ト河ヲ狹ンデ屯ス。各々相挑ム。云々。埴安彦之ヲ望ミテ、彦國葺ニ問ヒテ曰ク、何ノ由ニカ、汝兵ヲ興シテ來レルヤ。對ヘテ曰ク、汝天ニ逆キテ道ナシ。王室ヲ傾ケント欲ス。故ニ義兵ヲ舉ゲテ汝ノ逆ヲ討ツ。是レ天皇ノ命ナリ（印本「討」ノ字ノ上ニ「欲」ノ字有ルハ衍ナリ。一古本ニ據リテ之ヲ刪ル）。是ニ各々先ヅ射ルコトヲ爭ヒテ、武埴安彦先ヅ彦國葺ヲ射ルニ、中ルコトヲ得ズ。後ニ彦國葺、武埴安彦ヲ射ルニ、胸ニ中リテ殺ス。其ノ軍衆脅エ退ク。則チ追ヒテ河ノ北ニ破リテ首ヲ斬ルコト半バニ過グ云々。

これ朝敵皇地の埴を取りて、國を傾けんと咒詛せるが、忌登の神事に、賊の咒詛うち消されて亡びたる例なり。右の事ども、悉く文意をも註さま欲しけれど、容易からぬ事なれば、たゞ本文のみ記し出で侍り。また漢籍にも思ひ合すべき事あり。其は國語の晉語に、文公、翟より齊に行くことを記せる所に、五鹿ニ過ル、食ヲ野人ニ乞フ。（五鹿ハ衛ノ邑）。野人塊を擧ゲテ以テ之ニ與フ。（塊ハ璞ナリ）。公子怒リテ將ニ之ヲ鞭ウタントス。子犯ガ曰ク、天ノ賜ナリ。民土ヲ以テ服セバ、又何ヲカ求メン。天ノ事ハ必ズ象アリ。十有二年、必ズ此ノ土ヲ獲ン。二三子之ヲ志セ。歳壽星ニ在レバ鶉尾ニ及ンデ其レ此ノ土ヲ有タンカ。天以テ命ズ。壽星ニ復セントキ必ズ諸侯ヲ獲ン。天ノ道ナリ。是ニ由リタ之ヲ始メン。此ヲたもタンコトハ其レ戊申ヲ以テセンカ。土ヲのブル所以ナリト。再拜稽首シテ受ケテ之ヲ戰クと見えたるが、果して子犯が言の如くなりし事、春秋左氏傳、僖公が二十八年正月の處に見えたり。此は柳宗元が評せる如くにもあるべく、また本より神國にて、天神地祇の守護嚴重なるに、況て武備萬國に比類なく、神々しき御國なれば、「喧ぐとも國の御稜威に摧けなむ底よりの國ゆ寄する白浪」とは思へど、史記の三王世家、白虎通などに記せる、諸侯を封するに、其の方の色に當る土を賜ひて社に祭

らしめ、謂はゆる社稷を重んずる由緒などを思ふにも、異國人に土を取らする事は、よからぬ事と覺ゆ。然るは、外國々には、種々悪しき咒詛事のろひわざも多かりと聞ゆれば、偽りて漁船の状をなし、病人をも作り、咒詛の料に土を取りに来れるには非じかと、覺束なく思はるればなり。但し、此は己が怯きたき心の惑ひならんかも。

文政五年五月十八日

八 家 論

客有り、予に問ひて曰く、夫、聖は獨りのみにては尊からず、聖は單ひとつのみにては盡くし難し。故に、武王は法を箕子はかに咨り、仲尼は禮を老聃らうたんに問ふ。故に、上聖も亦必ず師授を待つて功を成し、上士は常に己むなを虚うして以て人を容る。孝弟忠信の目立ちて、天下の事治むべし。禮樂射御の法備はりて、揖讓進退の旨存せり。此れ所謂千載不拔の基なり。而るに吾子の云ふ所、大いに此れに異なり。其の尤も甚しきものは、三皇太古本は日本の神となし、外邦を觀ること附庸の如く、四海を云ふこと聚粟の如し。天豈特に日本に厚くして、四海に薄からんや。夫れ、妖言をなす者には、先王の刑有り、道を亂す者に、豈後王の典無からんや。吾子以て如何と爲す。予覺えず大いに笑ひて、之に應へて曰く、客の如きは、所謂膚受（淺薄）なるのみ。目は牆東を窺

ふこと能はず。耳は牕外に聴くこと能はず。周孔の池を游泳して、未だ驪龍の變化するを見ず。程朱の林に倉皇して、未だ崑崙の天を極むるを見ず。夫れ、其の國を亡するものは則ち其の君を亡す。其の君を亡するもの則ち其の父を亡す。周孔の遺教に未だ尊外の道を聞かず、程朱の餘言に豈卑内の旨有らんや。然るに世に苟くも吾子の如き者固より多し。示すに舊典の明文を以てし、開くに前賢の金言を以てすと雖も、尙、憤々として知ること能はず。故に予己むことを得ず、書數百卷を著はし、以て皇國の萬邦に君師たるを辨じ、且つ萬邦の皇國に臣弟たるを論ず。今夫れ、世の學を爲す者、特り捷徑之れ力め、踏襲之れ樂む。牛鬼蛇神、生吞活剝して至らざる所無し。而も其の實は則ち空々たる者、豈言ふに勝ふべけんや。故に、予の世學を目するに、大綱八有り。曰く、神家は神道を識らず。玄家は玄理を識らず。鑿家は鑿軌を識らず。易家は易威を知らず。曆家は曆式を識らず。日家（兵家カ）は日法（兵法カ）を識らず。儒家は儒非（儒旨トモアリ）を識らず。佛家は佛姦（佛義トモアリ）を識らず。吾子必ず此の一に居らん。次第を追うて（以つてトモアリ）問へ、答ふべしと。客口吐きて閉ぢず、舌擧がりて下らず。逡巡して去る。

近頃、公侯の筵に待す。屢々問ふに叟が學ぶ所如何と云ふを以てす。茫洋として對ふる所を知

立 言 文

三皇を祖述して、三墳の既に隠れたるを索め、五常を憲章して、五典の僅かに存するを探る。八卦を論定し、八索の遺威を拾ふ。九州を觀察し、九丘の全備を志す。

或人、予に赤縣學の稽式を問ふ。予答ふるに、斯の書を以てす。蓋し、三皇とは、天皇氏、地皇氏、人皇氏を謂ふなり。五常とは、太△、神皇、黃帝、小△、顓帝を謂ふなり。傳に於てこれ有り。三墳、五典、八索、九丘は、即ち上世帝王の遺書を謂ふなり。恐らくは其の書のみ。而して此の八氏は素より赤縣の生ずる所に非ず。寔に是れ我が青華の神眞、恭しく天祖の命を承けて、彼の州に君師として、一に大同の制を執りて、其の民を教養し、始めて之れに道德を傳へ、且つ之れに典要を授くるものなり。道とは何ぞ、天は地の綱と爲り、神は人の綱と爲り、君は臣の綱

らず、故に此の篇を書して以て引と爲す。蓋し此れ適ま慣る所有りて云ふのみ。古人云へること有り、曰く、憤せざれば啓せずと。苟くも人有りて予の此の言に慣らば、則ち亦啓する所有らんとす。然れども予未だ戎語に熟せず、字句恐らくは失錯有らん。覽る者之れを恕せよ。

天保三壬辰歲八月

號名 識

と爲り、父は子の綱と爲り、夫は婦の綱と爲る、是れなり。徳とは何ぞ、曰く敬、曰く義、曰く仁、曰く勇、是れなり。典要とは何ぞ、政刑、兵陳、律曆、度量、文字、卜筮、醫藥、凡そ天下を經綸し、民用を綱紀する所以のものは是れなり。

抑々、我が 惟神の本教、唯一の帝道は、固より此れ其の道の質なり。我が 先皇、茲に鑒むる ところ有り。故に、其の名を假りて、以て皇猷の贊と爲す。學者或は云ふ有り、堯舜を祖述し、文武を憲章するものなりと。予謂ふ、其の説や、彼の土に於ては則ち或は可ならん。天朝に於ては則ち 皇統素より佗を以て嗣と爲すの例無く、朝憲既に臣を以て君に代るの道無し。則ち 公簡の格以て察すべきかな。是の故に之れを三五の古始に執り、以て其の學の道紀と爲す。語に曰く、太上は徳を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つと。吾は惟我が宗とするところを宗として、獨り其の言を立つるのみ。亦豈敢へて信を不信の人に強ひんや。其の詳かなることは、赤縣太古傳を見て視るべし。時に天保四年、太陰癸巳に在る孟冬九日庚子、太一中宮に在る天禽の日天禽の時なり。



昭和十七年三月十五日
昭和十七年三月二十日
印發

平篤田の國學

定價 貳圓貳拾錢

刷行

著者 藤田德太郎
東京市本郷區西須賀町五

發行者 岩壁保
東京市麴町區有樂町一ノ一四

印刷者 久木印刷所
東京市日本橋區濱町二ノ三七

發行所 株式會社 道統社
東京市麴町區有樂町一ノ一四砂本ビル

電話 銀座 五四二一番
振替東京 一六五六一番
會員番號 一二〇五七〇番

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

——道統社既刊書——

影山正治著 (定價 一、五〇円・三)

大西郷の精神

著者は明治維新に於ける大西郷の精神の繼承者南洲遺訓作詩の講義を中心に、略傳を附す。

武田勘治著 (定價 一、五〇円・三)

不滅の人 吉田松陰

松陰の眞骨頂を端的に描寫してあます所がない。その盡分の志を傳へ、皇國民たる魂を甦らす。

辻森秀英著 (定價 一、八〇円・七)

加茂眞淵の精神

國學の父、加茂眞淵の思想と精神の眞髓を適確明細に傳へて剩す所がない。

宮田 戊著 (定價 一、八〇円・三)

一茶

一茶と共に喜び共に悲しむ心境で書かれた一茶の全傳である。

小野久三著 (定價 一、八〇円・三)

白隱 禪師

禪師の激しく高い求道の生涯と、生活的な禪精神を傳へ禪師独自の健康秘法を説く。

高村光太郎著 (定價 一、八〇円・三)

大いなる日

吾等日常の現代話が斯くも美しく高い精神を表現出来るかに驚く。

丸山幹治著 (定價 二、二〇円・四)

硯滴、餘録

大毎の硯滴、東日の餘録中より筆者會心のもののみを輯む。著者の博學達識は正に百科全書の概がある。

佐藤喜一郎著 (定價 二、〇〇円・三)

航空記

航空の知識を科學的に述べるに止まず、空の體驗生死のスリル等を生々と活寫す。

——道統社既刊書——

保田與重郎著 (定價 二,〇〇 円〇・三)

民族的優越感

日本人であることの喜びと誇りとを湧かせ日本人の眞の自信と勇氣を生ましめる書

生田長江著 (定價 一,八〇 円〇・三)

東洋人の時代

文化、思想、啓學論其の叡知を傾け盡して論じた東洋及東洋人論である。

谷 信一著 (定價 三,七〇 円〇・四)

近世日本繪畫史論

日本繪畫の近世的展開を、新鮮な方法と卓抜な見方によつて纏む。(出版文化協會推薦)

兒島喜久雄著 (定價 三,〇〇 円〇・四)

希臘の鍊

美術批評、隨筆、感想、紀行集。人文百年後を思ふ高邁な知性と豊かな情懷にあふる

高村光太郎著 (定價 二,八〇 円〇・四)

美について

著者が二十年振りに纏められた美の聖典。美の世界への開眼の書である。(出版文化協會、文部省推薦)

加藤武雄著 (定價 二,〇〇 円〇・四)

青草

土の文學者農民文學の父と云はれる著者の滋味溢るゝ人生體驗記錄。

宍戸儀一著 (定價 二,〇〇 円〇・四)

西行法師

利久や芭蕉の源流をなすこの偉大な日本の詩人の全て新しい研究。

相馬御風著 (定價 三,〇〇 円〇・四)

一茶素描

これまで誰にも知らなかつた一茶の新生面がこの書によつてはじめて傳へられた。

終

